

# 監修の序

炎症性腸疾患 (inflammatory bowel disease : IBD) は、過去にはまれな疾患でしたが、患者数の増加は著しく、消化器専門医ばかりでなく一般内科医が日常臨床で必ず遭遇する疾患となりました。潰瘍性大腸炎とクローン病は少し病態が異なりますが、その治療には、各患者さんの病態を把握し、それに基づいて適切に行っていくことが重要です。再燃寛解をくり返すIBDは、原因不明で根本治療がないため、速やかな寛解導入も大切であり、寛解維持には長期にわたり治療薬を安全に使用していくことも求められます。さらに、患者さんや家族などその周囲の人々にIBD治療薬を正しく理解していただき、最善の医療が提供できる環境がのぞまれます。

近年、IBDの治療薬は、革新的な新薬として注目されている抗TNF- $\alpha$ 抗体製剤をはじめとして種々の薬剤が使われるようになりました。5-ASA製剤と副腎皮質ステロイドだけの世界はおわり、複雑となったため個々の医師の力が問われ、すべての治療薬剤に精通していることが求められます。

本書は、IBD治療薬の正しい知識と適正な使用のために小林拓君と新崎信一郎君が中心となって、度々の試行錯誤をくり返したうえでできあがった他にはないユニークさをもった力作です。特に若手の消化器医師を対象として、実際に若手を指導している中堅に若手目線で編集・執筆をお願いしました。わかりやすさを重視しチェックリストでポイントがわかるようになっています。チェックリストのチェック数を目安に適切な治療が選べるようになっています。個々の薬剤について簡潔に記述されていて、IBDの日常臨床に直接役立つものであり、かつ、日常遭遇する実際の症例が呈示され、個々に応じた適切な治療法も議論されています。

本書が、病態に応じた適切な治療のために努力している多くの若手消化器医師やIBD専門医に少しでもお役に立てるものとなることを期待しています。

2015年9月

北里大学北里研究所病院 炎症性腸疾患先進治療センター センター長  
日比紀文

# 編集の序

この度は、数ある医学書の中から、本書を選んでいただきありがとうございます。本書は、IBD（炎症性腸疾患）患者の薬物治療に特化した、「よりわかりやすくより実践的な本」を目指した医学書です。IBD患者を診療する際に、最初はどんな治療薬から始めようか、次はどの治療を選択しようか、寛解には持ち込んだけれどどうやって維持しようか、など悩む場面が多々あるかと思えます。そんなときに、ぜひ本書を開いてください。

本書の特徴として、以下の3点を挙げたいと思います。

- ① 薬剤ごとの解説（第2章）では、冒頭に「チェックリスト」を掲載し、重症度や合併症の有無、入院・外来の違いなどをチェックすることで、どのような場合にその薬剤が適しているのかがわかります。
- ② 治療薬の導入・切り替えについての解説（第3章）では、第2章の「チェックリスト」を利用して症例を解説しています。チェックリストを活用することで、エキスパートの考え方が身につきます。
- ③ 薬の作用・処方例・副作用を単に記載するだけでなく、無効例や再燃例の対処法や寛解導入後の対応、患者への説明までしっかり掲載しています。

本書は薬物治療に特化した本ではありますが、薬剤以外の治療法である血球成分除去療法や外科的治療にも触れています。IBD診療に欠かすことのできない、これら非薬物治療についても学んでいただくことで、IBDに対する総合的なアプローチを身につけることができるように配慮いたしました。

本書を企画するにあたり、ほかにみられない実用的かつ特徴のある書籍にしたいという願いのもと、アイデアを試行錯誤の上で練り上げることから始めました。編集にあたっては、ひとりでも多くの先生方にお役立ていただけるよう、幾多の編集会議を重ね検討いたしました。そのなかで、われわれ編集者の未熟さゆえ、ご多忙なかで原稿を執筆頂きました諸先生方に、最後まで多大なるご迷惑をお掛けしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

に、実臨床に即した妥協なく質の高い原稿を執筆いただいたことに、心より御礼申し上げたいと思います。

最後になりましたが、夜間や休日にもお仕事をお願いした関家麻奈未様、谷口友紀様はじめ羊土社編集部の皆様、そして本書を監修頂きました、北里大学北里研究所病院炎症性腸疾患先進治療センター長 日比紀文教授に、この場をお借りして深謝申し上げます。

2015年9月

小林 拓  
新崎信一郎